

江戸切子 (GLASS-LAB 代表取締役・椎名隆行さん)

心揺さぶる硝子の造形

ひらざりこ
平切子とサンドブラストの技法を組み合わせた砂切子。

驚くほど精緻なその技法は、
江戸切子の世界に新しい風を吹かせ始めている。

不思議なグラス

ちょっと不思議なグラスがある。
水を入れると、底面の模様が広がる
ように見えるのである (表紙参照)。

これはGLASS-LAB (グラス-ラボ)
が2019年に発売した江戸切子「砂切
子シリーズ」とネーミングされたグ
ラスだ。江戸切子に伝わる平切子と
呼ばれる技法と、サンドブラストの
技法を組み合わせでつくられたもの
である。グラス底面の模様が広がる
ように見えるのは、水を入れること
で光の屈折率が変わり、底面の模様
が側面に反射するためだ。

この新しい江戸切子の製品を仕掛
けたのは、GLASS-LABの代表取締
役である椎名隆行さん。生家は江東
区でガラス加工の工場を営む椎名硝
子。その2代目社長、椎名康夫さん
の長男として生まれた隆行さんだが、
自分は江戸切子の職人に向いていな
いと考えて家を継がず、大学を卒業
したら不動産会社に就職。その後、
商社を経て不動産のポータルサイト
を運営するIT企業に転じた。

「仕事は面白かったし、営業の成績
も会社でトップでした」

と言う隆行さんだが、36歳のとき
にその会社を退職してしまう。

「ベンチャーだったからか、独立し
て起業する先輩がたくさんいました。
あるとき、いつも僕に『男は夢を持
たなくては』と言っていた上司も退
職して起業したんです。僕はこの方
に、椎名硝子を継いだ弟につくって
もらったグラスを、プレゼントした
ことがあります。絵や文字を彫刻し
た江戸切子のグラスで、上司はとて
も喜んでくれました。思いを込めて
つくられたものが人の心を揺さぶる
のを目の当たりにした瞬間でした」

ところがこの元上司が病気のため
突然、亡くなってしまった。その衝
撃から隆行さんは「自分も残された
時間が少ないかもしれない」という
思いを強くし、独立を決意したのだ
った。

「自分に何ができるかと考えたとき、
勤めていた会社で培った広告とIT
の知識と人脈に、家業のガラス加工
を組み合わせたら、自分にしかない

強みになるのでは、と考えたのです。
ガラス加工業は成長産業ではないか
もしれませんが、新規参入がほとん
どないよさもあります」

平切子の役割

こうして隆行さんは2014年、GLA
SS-LABを創業した。

隆行さんは職人ではない。江戸切
子の製品をつくる技術は持っていない。
だから隆行さんが企画を考え、
営業をし、受注した製品を椎名硝子
に発注してつくってもらうというス
タイルにした。椎名硝子は小売りを
していない。基本はB to Bのビジネ
スモデルだ。だからGLASS-LABは
椎名硝子とバッティングしないよう
に、B to Cのビジネスモデルを基本
にしている。つまり小売りだが、受
注生産を主軸にし、在庫は極力持た
ないようにしている。

世界にたった1つの特別なカスタ
マイズグラスをつくる、というのが
キャッチフレーズだ。

江戸時代の天保年間に始まったと



左から、サンドブラストを担当する椎名康之さん、平切子職人の椎名康夫さん。そして、GLASS-LAB代表取締役であり企画・営業・広報までこなす、椎名隆行さん。



写真左、平切子の研磨作業。大小さまざまなサイズからなる、車輪のような刃で削っていく。写真右は、サンドブラストで彫った「北斎ガラス」の『富嶽三十六景 神奈川冲浪裏』。

されるガラス工芸の江戸切子という
と、麻の葉、矢来、籠目などの直線的で幾何学的な模様が彫られている
ものが多い。ところが江戸切子には
平切子という技法もある。研磨機を
使ってガラスの面を平たくしたり滑
らかにしたりする技法だ。

江戸切子にはしばしば透明なガラ
スに色ガラスを重ねた被せガラスが
使われる。その色を被せた面のガラ
スを平切子の技法で削ると、透明に
なる。そうして江戸切子は鮮やかな
色の対比を描き出すわけで、被せガ
ラスは重要な役割を果たしているこ
とになる。しかし、どうしても脇役
的な技法になることもあり、平切子
を得意とする職人は減り続けてきた。
隆行さんによれば平切子ができる職
人は今、全国でも10人くらいしかい
ないそうである。隆行さんの父親の
康夫さんはその数少ない平切子の職
人である。

一方、サンドブラストというのは
砂などの研磨材をコンプレッサーで
吹き付けて加工する技法のことだ。
もともとは錆落としや塗装はがしな
どに使われていたが、ガラス面に文
字や模様を彫刻する技法としても広
く使われている。

幅0.09ミリの線を彫る

隆行さんの弟で現在、椎名硝子の
社長を務める康之さんは、このサン
ドブラストの技法を得意とする職人
だ。

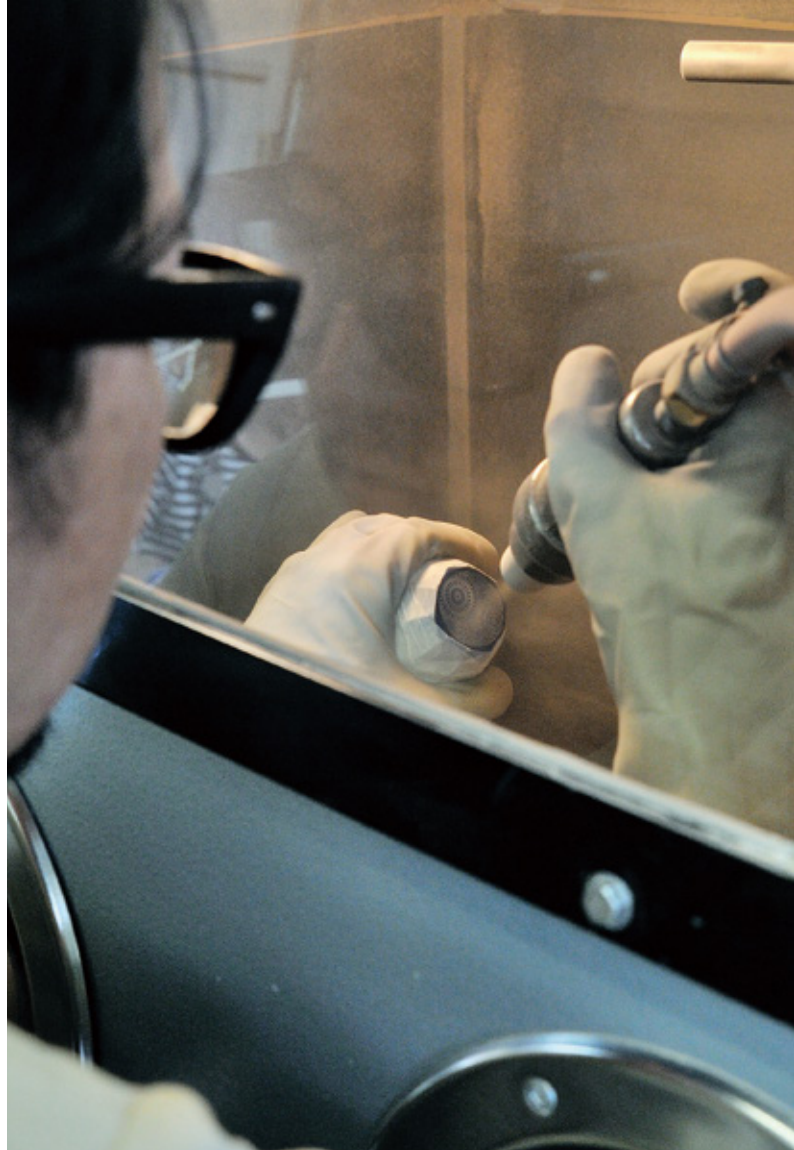
「弟は以前から江戸切子以外にもガ
ラスのトロフィーに名前を彫ること
などにサンドブラストの技法を使っ
てきました。弟は幅0.09ミリの線を

彫ることができ、サンドブラストに
詳しい人によれば世界レベルの技術
だそうです」

試しに康之さんの作品を見せても
らい驚愕した。葛飾北斎の「富嶽三
十六景 神奈川冲浪裏」の浮世絵を、
細かい波しぶきなどはもとより色の
グラデーションまで見事に再現して
いるのだ。この「北斎ガラス」は注
文しても3カ月待ちの人気商品とな
っている。

2019年3月に東急プラザ銀座で開
かれた「江戸切子桜祭り2019」では、
江戸切子の名工がそれぞれの自信作
を出展したが、WEBによる投票で
は康之さんの作品「旅の扉」が堂々
の第2位に選ばれている。

隆行さんは、康夫さんの平切子と
康之さんのサンドブラストの技法を
組み合わせて、これまでの江戸切子
にはなかった新しい表現を実現し、
GLASS-LABにしかない「砂切子」



写真左はサンドブラスト作業。模様が切り抜かれたマスキングシートを貼ったガラスの底に、研磨剤を吹き付けて模様を削っている。写真右下がロゴの彫られた醤油さしの栓。

として売り出すことにした。そしてそれがテレビ番組で紹介されたことにより、砂切子の商品は「爆発的に売れている」のだと隆行さんは言う。

GLASS-LABは地下鉄清澄白河駅から歩いて数分のところにある。いかにも下町らしい雰囲気この町では今、外国人や日本人の若い観光客の姿がしばしば見られる。しかし以前は人通りも少なく、閑散とした町だったという。その町に2015年、サードウェーブコーヒーの代表格とも言われる外資系のコーヒー店ができたことで、注目度がにわかに高まった。これを見て隆行さんは椎名硝子の工場を公開し、土・日曜日には体験型の見学会を開くようにした。

ほとんど産業遺産の研磨機

椎名硝子の工場には1950年の創業当時から使っている4台の研磨機が

ある。手作りの木製機械で、この工場以外ではめったにお目にかかれないほとんど産業遺産的な機械だ。しかも4台の研磨機をベルトでつないで1台のモーターで動かす光景は圧巻の迫力がある。そのため土・日曜日には何組もの見学者が訪れる人気ぶりだ。

GLASS-LABでは、カスタマイズガラスの注文生産に応じているほか、液だれしない醤油さしも販売している。この種の商品は他の店でも販売しているが、隆行さんはそこにGLASS-LABらしいひと工夫をしている。「醤油さしの栓の裏側にサンドブラストで好きな文字や絵を入れることができるようにしています。実はある外資系企業から、栓の裏にその会

社のロゴマークを彫って1,300個つくってほしいという注文をいただいたことがあります。今、海外では日本の寿司が大人気で、醤油さしも日本のトラディショナルな小物として人気があるようです。栓の裏側ですから、ロゴは普段は見えないのですが、それがかえって押しつけがましくなくていいと好評なんですよ」 「砂切子」の好調な売れ行きに手応えを感じた隆行さんはオリジナルのカラーバリエーションを増やしている。新しい絵柄の製品も準備中だ。江戸時代から続く江戸切子の世界に、新しい風が吹き始めている。

しいな・たかゆき 1978年、東京都生まれ。2014年、GLASS-LABを創業。2018年に法人化した。「ガラスを通じて人の心を揺さぶる」ことを社是としている。地元・清澄白河の町をこよなく愛し、3年に一度の富岡八幡宮例大祭のときには必ず神輿を担ぐ。地元の活性化のためにさまざまなイベントの企画や情報発信もしている。地元の仲間と共同でシェアオフィスの事業も手がけている。趣味のムエタイ歴はすでに7年になる。